

長岡市旧山古志竹沢 星野家住宅について

A Study of the Hoshino House in Takezawa, Yamakoshi area in Nagaoka City

平山育男

Ikuo HIRAYAMA

The Hoshino house is a sericulturist farmhouse built in 1884.
It shows how the life used to be in Yamakoshi in Meiji era.

Keywords : sericulture, farmhouse
養蚕、農家

1 はじめに

平成17(2005)年11月、長岡市古志(旧山古志村)竹沢二丁野に所在する星野家住宅主屋の建築調査を実施した。星野家は平成16(2004)年10月23日の中越大地震で被災し、軸組の傾斜・不陸、

建物内部における建具の破損、土壁の崩落、床板のゆがみ、風呂場タイルの破損などが見られた。

以下では、星野家住宅の概要、主屋の概要、主屋の復原等を述べるものである。

2 山古志への道のり

山古志は越後山地の懷に抱かれ、南向に開いた谷間中腹に開けた集落の群である。長岡市の中心市街地からは、蓬平もしくは小千谷方面に向かって浦柄から登る国道291号線の道のりがある。前者をたどり、星野家の位置する竹沢二丁野までの道程と山古志の風土について先ず述べてみたい。

自動車で山古志に向かう場合、長岡からは国道17号線を東京

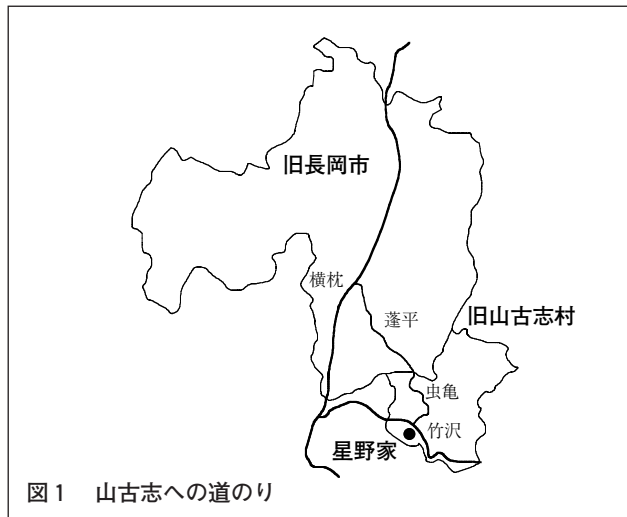
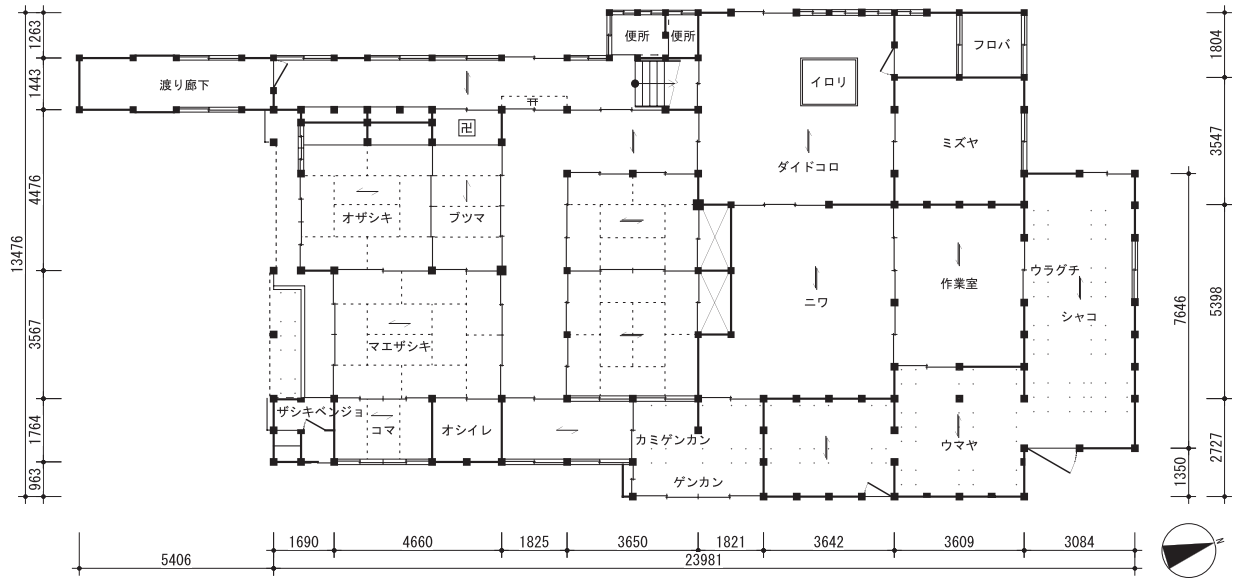


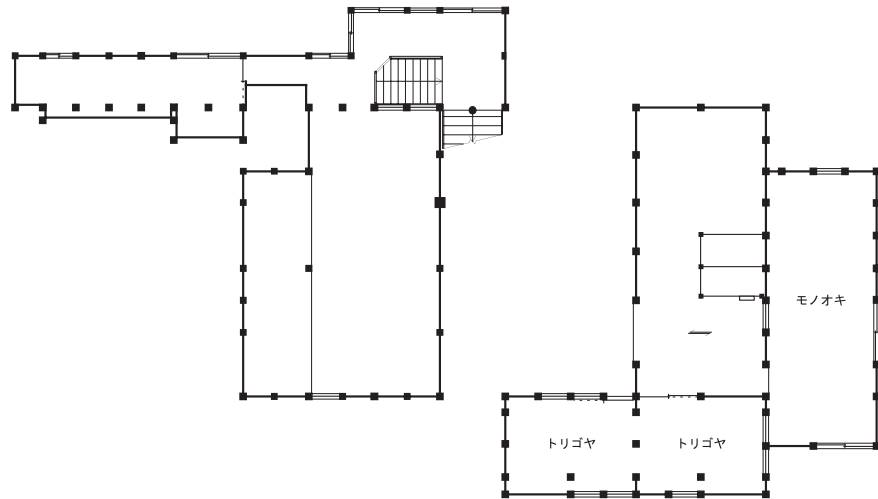
図1 山古志への道のり



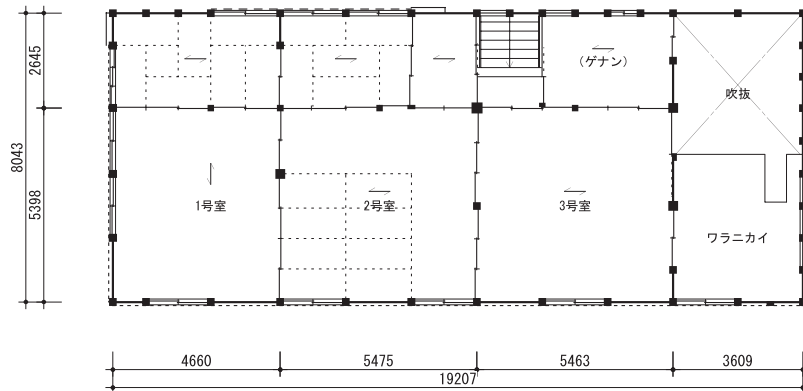
写真1 正面南より



1階



中2階



2階

図2 星野家住宅平面図

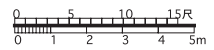




写真2 側面 南より



写真3 背面 南西より

方面へ進むこととなる。横枕の交差点で左に折れ、山の麓を走る県道の旧道を進むと道はいつしか太田川に沿って東山の奥に入って行く。途中で龍神社等の名泉、滝を見ることができるが、谷底を縫うように走る道を8km程進むと、蓬平と山古志の分岐である三差路に至る。ここで太田川に掛かる橋を渡って右折すると道は途端に急峻となり山の裾を駆け上がることとなる。旧市村境を越えると更に道は険しくなり、大きく屈曲する道路を登り切ると、道は山古志を囲む山の裾を越え、谷間を一望できる峠にたどり着く。気付くと太田川との分岐以後、住宅は数える程であるが、峠を越えた瞬間、山裾を背景に家並みが始まる。ここが虫亀むしがめの集落であるが、集落の北側にそびえる山並み

は冬季の季節風を和らげる自然の要害といえよう。山の中腹に開けた集落の中を、やや道幅の狭い屈曲した道が延びてゆく。道は等高線に沿ってほぼ進むため、上り下りが比較的少なく、進行左側は山裾や住宅、右側は田圃、池が谷間の地形を利用しながら階段状に広がる。即ちここに広がるのが山古志を代表する「棚田」の風景である。また、このあたりから養鯉業者の住宅が幾つか見受けられるようになる。突如現れる「KOI FARM」の看板は海外からの買い付けのあることをよく示すものであろう。実際、乗合タクシーにて訪れ、養鯉池を覗く欧米人によく出くわす。棚田には、隅部を円弧に丸めた優しい造形を持つ池も多く散在する一方、地肌を剥き出し、土留工事のなされた傾斜地がこれに隣接する。災害と生活が隣り合う様を垣間見る瞬間である。虫亀の集落を越えると竹沢となる。傍らには種芋原方面へ抜ける羽黒トンネルが分岐するが、この斜面は今回の地震で大規模な土砂の崩落があり、山裾は土留工事により景観が一変した。

さて、竹沢には小・中学校、消防署、旧役場(現市役所支所)、郵便局などが配され、旧山古志村地域では中心的な存在と言えよう。これらの施設の脇を抜けると道は国道291号線との合流点である「大内三叉路」に達する。ここでは広神方面へ国道を折れ、山裾を更に登ることとなるが、この傍らに点在するのが竹沢集落を構成する家々である。坂を登り切る竹沢トンネル手前の県道を塩谷方面へ右折すると、視界が急に開け、右手前方に越後山地の山々を遠望することができる。そして、その傍らのやや高い敷地に東面して位置するのが今回調査した星野家住宅である。なお、敷地裏側には山古志錦鯉総合センターがあり、背景には焼山とここに設けられた古志高原スキー場を望むことができる。

3 星野家と住宅の歴史

竹沢でも二丁野の集落は星野姓が大半で、他に佐藤姓がわずかに見られる程という。

本住宅を住居とする星野家は当家が9代目に当たり、元々は分家筋とされる。分家の時期は明らかではないが、過去帳などから判断すると18世紀前期頃の分家と考えるのが妥当であろう。

住宅の建築は6代目が行った。建築の年代は明らかでないが、明治17(1884)年頃とされ、完成まで3年の歳月を掛けたと伝承される。

昭和戦前期までは養蚕が行われ、その他には稲作、畑作が行われた。養鯉が盛んになったのは大正時代末頃からであるという。

4 星野家住宅主屋について

・敷地

敷地は県道に東面し、間口が40m程と広く、奥行は20m程とり、全体的に南から北に向けて焼山からの傾斜が続く。敷地面は平坦に整地がなされたようであるが、東、北、西の三周は公道から一段高い場所に位置する。このため前面の東側は前庭が緩やかな傾斜地となり、北及び西側背面において公道とは土留めの崖が築かれる。

敷地内には公道から5m程奥まって主屋が東面して配される。また、南東隅部には消防団倉庫の際、公道に面して鉄筋コンクリート製の車庫兼納屋があり、南西隅にはかつて蔵が2棟あったというが現在は養鯉池が築かれている。なお、敷地南部分にはかつて池を持つ庭が築かれていたというが、現在は敷地南及び西周縁にかけて杉をはじめとする樹木が立ち並んでいる。

・主屋

主屋は木造二階建、一部中二階入母屋造平入トタン葺の形式である。二階の東及び南面はほぼ全面が窓による開口部で、東面する主屋の形式と併せ、養蚕農家の出で立ち一見して強く印象付ける容姿である。建物の正面の桁行が11間半で24m程、奥行である梁行が7間半、13m程で、南西角にかつて土蔵に続いた廊下が2間半程残り、北面に中古に建設された間口1間半、奥行4間程の規模を有するシャコが取り付く。主屋は中心の桁行10間半、梁行4間半が2階まで建ち上がって周囲は原則的には通柱で構成し、この東、南、北の3方に幅1間程の下屋を回す構成となる。

主屋へは正面中央に設けられたゲンカンから入ることができる。ゲンカンは間口2間で、かつては土間であったニワとオザシキの側へ続く南側のカミゲンカンに分かれる。ゲンカンの下手は旧ベンジョでウマヤへと続く。3間四方の広さを有するニワの現状は板敷で、下手がサギョウシツとなる。裏側がやはり3間四方の広さを持つ板敷のダイドコロで上手部屋隅部にいわゆる大黒柱が建ち、下手にミズヤ、フロバが配される。ゲンカンからカミゲンカンを進むと、廊下が□の字に配され、この内側に前から8畳、6畳の2室の居室が置かれ、西側の廊下上に神棚があり、階段を挟んだ背面をベンジョとする。なお、それらの上手は表の下屋にオシイレ、コマ、ザシキベンジョを設け、10畳のマエザシキ、裏側には下手に4畳のブツマ、上手に8畳でトコ、タナ、平書院を持つオザシキを構える。なお、南側上手には部屋境に屈曲して板縁を置き、マエザシキ部分には土庇も置く。また、オザシキの西裏はタナとなり、旧土蔵への廊下へつながる。

中2階は□型の廊下と2室の居室、背面廊下の上部一角と、ゲンカン脇の旧ベンジョ、ウマヤ、サギョウシツ、ミズヤ、フロバ及びシャコの上部に分かれて造られる。前者は便所前の廊



写真4 ダイドコロ 南東より



写真5 オザシキ 東より



写真6 2階 北西より

下から昇るもので、居室上の部分はモノオキ、廊下上は居室に用いられた。後者は前面の旧ベンジョ、ウマヤ、サギョウシツ上がトリゴヤ、その他がモノオキ等に用いられた。

2階は前述した上屋部分に配されるものである。上手から桁行を2間半、3間、3間、2間に区切り、前者3柱間部分を部屋として用い、この部分を更にいわゆる大黒柱の建つ筋で前から3間と1間半に区切る。表側3室は上手から板敷で15畳広さの1号室、18畳の2号室、板敷で18畳広さの3号室と呼称され、裏側の部屋は居室とされた。1号室の裏は7畳半、2号室裏は上手から6畳と3畳に2分され、階段を挟み、下男が用いたとされる3号室裏の6畳となる。下手の2間分は背面が中2階からの吹き抜けで、表側2間半がワラニカイとされ物置として用いられた。

5 星野家住宅主屋の復原

主屋は比較的当初の形式をよく伝えるものの、各所は大小様々な改造を受けている。以下、創建時期の考察を行い、次いで建物に対する大きな改修を述べ、平面の解説順に復原考察を述べたい。

この住宅の建築年代を示す1次資料を見いだすことはできなかった。但し聞取によれば前述のように明治時代中期、明治17(1874)年の建築で完成までに3年の月日を有したという。なお、当初は後述するウラチュウモンは主屋に接続はしなかったと考えられるものの、風喰などの状態をみると、創建後かなり早い時期にウラチュウモンの建築がなされたと考えることが可能である。ところでこのウラチュウモンは聞取によれば昭和37(1962)年の第2室戸台風により敷地背面の杉の木が倒れ、その建物を壊したため、主屋内部に居室を設けたという。これがカミゲンカンから続く2部屋の居室であり、更にウラチュウモンの部材を使いながら主屋下手のシャコを設けたという。実際、シャコでは明らかに転用材と見られる材が、柱、梁を中心に確認することができた。以下、ゲンカンから、建物の復原を述べる。

ゲンカンは現段階では合板材により壁部分が覆われるため、正確な復原は不可能であるが、接続するニワの板敷材は新しく、聞取によっても当初は土間とされる。現状の敷・鴨居高さが板敷の実施にともなって上げられた可能性が高い。当初の柱間装置は大戸であろうか。

旧ベンジョは柱、梁に数々の痕跡が残るものの当初の形態を想定することは難しいが、ゲンカン際の半間が入口で3つの個室が復原される。なお、中古にコンクリート製の便槽が造られ、北側1間は物置として利用された。

ウマヤではかつて牛を3頭は飼ったという。昭和42(1967)年頃、床・土台をコンクリート敷に改めた。なお、ウマヤは土壁の保護のため、土壁内側に板壁が設けられるが、現状ある北側半間の開口部には、柱の板溝が確認されることから、この開口部分は当初、土壁と板壁に復原される。

ニワは当初一面の土間であった。

サギョウシツはニワ側の南西部分1坪半がタキモノオキバとして区切られる。なお、この住宅では土壁下地の小舞を柱に止めるため竹釘を用いる。貫と竹釘の痕跡が、南側中央の柱北面に見られた。また、部屋中央に配される東西方向の梁下端には柱柄の痕跡があり、この一角がタキモノオキバとして復原される。

ダイドコロ一面の板敷であるが、床下には幾つかの穴が穿かれる。いずれも食物保管用のもので、ニワ境のものがイモアナでサトイモ、イロリ際のものがサツマイモを入れるという。ニワ境における間仕切りは昭和42(1967)年頃におけるもので、当初は開放と考えられる。イロリは当初は北側にやや長く、当主

が現状の規模に縮めたという。現状ではイロリにストーブを置き煙突を設けるが、これも最近のもので、ストーブは2、3年で交換するという。

ミズヤ、フロバは現状で柱、壁が合板に覆われ復原は難しい。なお、2室の北、西面は腰高までコンクリート製の布基礎が立ち上がり、土台が回される。最近の仕事と判断される。

カミゲンカンは現状では南向きに置かれるが、ニワ寄のゲンカン南側の1間では窓とする中敷居が新しい。このためこの1間をカミゲンカンとして復原することができる。また、この隣の柱間は、現状では北から窓、掃出となるが、窓の中敷居、柱が新しく、当初は2間の掃出に復原される。また、東面の窓は、南側のオシイレ部分に戸袋が復原されることから、2間には1本引の建具が復原される。

□型の廊下と2室の居室部分は、昭和37(1962)年の第2室戸台風のウラチュウモン解体に併せて造られたもので、これらの間仕切りを撤去すると、この部分は1室で27畳にも及ぶチャノマとなる。この中2階部分も同時期のものであり、復原すると規模が大きく天井も高い勇壮な空間に復原できる。

ベンジョも昭和37(1962)年以後の建築であるが、当初の柱を生かしながらのものと考えられる。

オシイレは中古に区切られたようで、当初は南側のコマと1室と考えられる。

ザシキベンジョは中古のようで、ゲンカン際のベンジョ装置を移動させた可能性もある。北側の1間は引違戸に復原される。

マエザシキ、ブツマ、オザシキは大きな改変はなく当初の形式をよく伝える。オザシキ境に建てられる襖戸に明治21(1888)年の銘があり、これが建立年代に近いものと言えるだろう。なお、この建物では和釘が用いられる。明治17(1884)年の建築という伝承から妥当と言えるが、オザシキ南側の内法長押には洋釘が確認される。当初と中古、両者の可能性がある。

中2階は、チャノマ上、背面廊下部分が昭和37(1962)年以後の中古である。トリゴヤが当初まで遡るものかは明らかではないが、造りとしては古い。モノオキも同様である。

2階は南側6室を区切る材はいずれも当初までは遡らず、昭和戦前期頃のものだと判断される。それ以前は北側の2間を除き、1室の蚕室として使ったとするのが妥当であろう。北側2間は当初の仕事ではないが、早い時期に床が張られたものと判断された。

6 さいごに

星野家住宅は明治17(1884)年頃の建築とされる養蚕農家である。明治時代の山古志では養蚕が盛んであったが、それを示すものを現在ほとんど見ることができない。本住宅はそれを具体的に示す、山古志における歴史の貴重な証人とも言える。それらの面からも今後、保存を含めた手厚い対応が望まれる。